

日中大学フェア&フォーラム in CHINA 2019



国立研究開発法人科学技術振興機構
中国総合研究・さくらサイエンスセンター



Contents

開催概要	1
1.「開会式・講演会」	9
2.「日中学長円卓会議」	12
3.「日中交流会」	13
4.「日中学長個別会談」	14
5.「日本大学フェア・日本新技術展」	15
6.「アンケート」	17

日中大学フェア&フォーラム in CHINA 2019

<開催概要>

日程：2019年5月25日（土）～26日（日）

会場：四川錦江賓館（中国成都市人民南路二段80号）

主催：科学技術振興機構、中国科学技術部（国家外国専門家局）

共催：中国国際人材交流協会、四川省科学技術庁（四川省外国専門家局）

協力：成都市科学技術局

後援：日本学術振興会北京研究連絡センター

実施協力：四川省科学技術交流センター

開催スケジュール：

5月25日（土）

■ 開会式及び講演会（13:00-15:00）

会場：1階蘆浮花園

使用言語：日中同時通訳

規模：約600名

<開会式>

司会：中国国際人材交流協会 瀋 艶傑 副主任

主催者側挨拶

・中国国際人材交流協会 張 建国 副主席兼秘書長

・科学技術振興機構 甲田 彰 理事

・科学技術振興機構 中国総合研究・さくらサイエンスセンター 有馬 朗人 センター長

来賓挨拶

・日本文部科学省 科学技術・学術政策局 松尾 泰樹 局長

・四川省科学技術庁 楊 品華 副庁長（四川省外国専門家局 局長）

・成都市科学技術局 丁 小斌 局長

<記念撮影>

<講演会>

司会：科学技術振興機構 甲田 彰 理事

・成都天府国際空港新城管理委員会産業工作組 熊 懷智 副組長

・大連理工大学 郭 東明 学長

・国立高等専門学校機構 谷口 功 理事長

・中小企業基盤整備機構 秋庭 英人 副理事長

・日中経済協会 杉田 定大 専務理事

・科学技術振興機構 中国総合研究・さくらサイエンスセンター 沖村 憲樹 上席フェロー

- 日中学長円卓会議（15：30-17：30）
会場：1階鴻賓庁、四季庁（2分割）、2階錦江庁（2分割）、錦城庁。全6会場
趣旨：日中共同の課題について議論し、相互理解を深める
テーマ
A：Teacher training and evaluation by universities
B：How to promote Japan-China collaborative research
C：Developing globally-minded human resources
D：Best practices for industry-university collaboration
E：The international collaboration on the education of technician
- 日中交流会（18：00-19：30）
会場：1階蘆浮花園
趣旨：日中の関係者に人的ネットワーク拡大の場を提供する

5月26日（日）

- 日中学長個別会談（9：30-12：30）
会場：2階錦江庁
趣旨：日中の学長同士の意見交換を通じて、トップレベルの交流の促進に繋げる
- 日本大学フェア（9：30-12：30）
会場：1階蘆浮花園
趣旨：現地大学等との学術交流、日本への留学希望者へ留学制度等の情報を提供する
- 日本新技術展（9：30-12：30）
会場：1階蘆浮花園
趣旨：研究成果・技術シーズ展示を通じ、技術移転や国際産学連携を促進する

備考：日本側参加者向け視察スケジュール

5月25日（土）

成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地視察（8：00-12：30）

5月26日（日）

四川大学望江キャンパス等視察（13：00-20：00）

5月27日（月）

天府新区計画庁、清華四川能源インターネット研究所等視察（8：00-16：00）

◆日中学長円卓会議参加者一覧（日本側）

1	会津大学	程 子学 副理事長・副学長
2	朝日大学	大友 克之 学長
3	岩手大学	岩渕 明 学長
4	大阪大学	河原 源太 理事・副学長
5	岡山大学	槇野 博史 学長
6	お茶の水女子大学	棚橋 訓 副理事
7	香川大学	笥 善行 学長
8	金沢大学	山崎 光悦 学長
9	熊本大学	原田 信志 学長
10	工学院大学	鷹野 一郎 副学長
11	高知工科大学	磯部 雅彦 学長
12	神戸大学	武田 廣 学長
13	埼玉工業大学	巨 東英 副学長
14	佐賀大学	寺本 憲功 理事・副学長
15	滋賀県立大学	廣川 能嗣 理事長 兼 学長
16	静岡大学	石井 潔 学長
17	首都大学東京	綾部 真雄 副学長
18	信州大学	田中 清 副学長, グローバル教育推進センター長
19	総合研究大学院大学	長谷川 真理子 学長
20	千葉大学	山田 賢 理事
21	東海大学	山田 清志 学長
22	長崎大学	河野 茂 学長
23	名古屋大学	渡辺 芳人 審議役
24	名古屋工業大学	岩本 雄二 副学長 (国際担当)
25	兵庫県立大学	高坂 誠 副学長兼国際交流機構長
26	弘前大学	佐藤 敬 学長
27	北海道大学	西井 準治 理事・副学長
28	三重大学	鶴岡 信治 副学長
29	宮崎大学	池ノ上 克 学長
30	横浜国立大学	長谷部 勇一 学長
31	早稲田大学	弦間 正彦 国際担当理事
32	国立高等専門学校機構	谷口 功 理事長
33	石川工業高等専門学校	須田 義昭 校長
34	鹿児島工業高等専門学校	氷室 昭三 校長
35	熊本高等専門学校	荒木 啓二郎 校長
36	沼津工業高等専門学校	藤本 晶 校長
37	福島工業高等専門学校	山下 治 校長

◆日中学長円卓会議参加者一覧（中国側）

1	北京化工大学	王峰	副学長
2	北京交通大学	寧濱	前学長
3	長春理工大学	楊玉新	党委書記
4	成都理工大学	劉清友	学長
5	重慶大学	劉漢龍	副学長
6	大連理工大学	郭東明	学長
7	電子科技大学	胡皓全	副学長
8	広州大学	郭興蓬	副学長
9	貴州大学	張覃	副学長
10	昆山デューク大学	Denis Simon	常務副学長
11	蘭州大学	李玉民	副学長
12	青海大学	曲江尚瑪	副学長
13	上海交通大学	黄震	副学長
14	蘇州大学	熊思東	学長
15	同濟大学	顧祥林	副学長
16	香港中文大学（深圳）	顧陽	副学長
17	西華大学	費凌	副学長
18	西交利物浦大学	席西民	執行校長
19	西南財經大学	尹慶双	副学長
20	西南交通大学	馮曉雲	副学長
21	西南科技大学	楊世源	副学長
22	西南石油大学	張烈輝	副学長
23	西藏大学	楊丹	副学長
24	中国科学技術大学	杜江峰	副学長
25	中国科学院大学	蘇剛	副学長
26	中南大学	郭学益	副学長
27	中山大学	李善民	副学長
28	成都工業学院	葉仲斌	副学長
29	成都紡織高等專科学学校	夏平	学長
30	成都農業科技職業学院	劉智慧	院長
31	四川建築職業技術学院	李輝	院長
32	四川職業技術学院	黄遠新	院長

◆日中学長個別会談日本側出席学長一覧

1	会津大学	程 子学 副理事長・副学長
2	朝日大学	森下 伊三男 副学長
3	岩手大学	岩渕 明 学長
4	大阪大学	河原 源太 理事・副学長
5	岡山大学	槇野 博史 学長
6	お茶の水女子大学	棚橋 訓 副理事
7	香川大学	笥 善行 学長
8	金沢大学	山崎 光悦 学長
9	熊本大学	原田 信志 学長
10	工学院大学	鷹野 一郎 副学長
11	高知工科大学	磯部 雅彦 学長
12	神戸大学	武田 廣 学長
13	埼玉工業大学	巨 東英 副学長
14	佐賀大学	寺本 憲功 理事・副学長
15	滋賀県立大学	廣川 能嗣 理事長 兼 学長
16	静岡大学	石井 潔 学長
17	首都大学東京	綾部 真雄 副学長
18	信州大学	田中 清 副学長, グローバル教育推進センター長
19	総合研究大学院大学	長谷川 眞理子 学長
20	千葉大学	山田 賢 理事
21	東海大学	山田 清志 学長
22	長崎大学	河野 茂 学長
23	名古屋大学	渡辺 芳人 審議役
24	名古屋工業大学	岩本 雄二 副学長 (国際担当)
25	兵庫県立大学	高坂 誠 副学長兼国際交流機構長
26	弘前大学	佐藤 敬 学長
27	北海道大学	西井 準治 理事・副学長
28	三重大学	鶴岡 信治 副学長
29	宮崎大学	池ノ上 克 学長
30	山梨学院大学	古屋 光司 学長/理事長
31	横浜国立大学	長谷部 勇一 学長
32	早稲田大学	弦間 正彦 国際担当理事
33	国立高等専門学校機構	谷口 功 理事長
34	石川工業高等専門学校	須田 義昭 校長
35	鹿児島工業高等専門学校	氷室 昭三 校長
36	熊本高等専門学校	荒木 啓二郎 校長
37	沼津工業高等専門学校	藤本 晶 校長
38	福島工業高等専門学校	山下 治 校長
39	独立行政法人中小企業基盤整備機構	秋庭 英人 副理事長
40	国立研究開発法人理化学研究所	加藤 重治 理事

◆日本新技術展出展機関一覧

<マテリアル・リサイクル>

- 1 株式会社社会津工場 吉田 幸男 業務改革室 室長
Hプロセス工法によるロストワックスに迫る精密鑄造をダクタイル薄肉鑄物製品で実現
- 2 大阪工業大学 伊與田 宗慶 工学部機械工学科 講師
溶接継手の強度改善に貢献する健全性評価技術と溶接手法
- 3 鹿児島工業高等専門学校 徳永 仁夫 機械工学科 准教授・副校長（国際交流担当）
空気圧を利用して発生させた水中衝撃波の応用
- 4 九州大学 谷口 育雄 カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所 准教授
常温成形可能な生分解性プラスチック
- 5 熊本高等専門学校 井山 裕文 機械知能システム工学科 教授
水中衝撃波によるマグネシウム合金板の高速成形
- 6 熊本大学 和田 翼熊本創生推進機構 イノベーション推進部門 URA
KUMADAI マグネシウム合金の開発
- 7 工学院大学 阿相 英孝 先進工学部応用化学科 教授
アノード酸化による金属・半導体表面の微細構造の制御
- 8 電気通信大学 TLO（株式会社キャンパスクリエイト） 安田 耕平 代表取締役
ヒートシンク式レーザ樹脂溶着法
- 9 福島工業高等専門学校 赤尾 尚洋 機械システム工学科 特命准教授
熱電変換材料の高強度・高性能化に関する研究
- 10 法政大学 明石 孝也 生命科学部環境応用化学科 教授
廃LED素子からの有価金属の乾式リサイクル装置の開発

<超スマート社会>

- 11 中部大学 常川 光一 電気電子システム工学科 教授
自律思考ロボットとEV電波マーカ式自動走行/無線充電
- 12 長崎県立大学 森田 均 国際社会学部教授
路面電車網から構築するICT統合型インフラSTING
- 13 名古屋工業大学 伊藤 孝行 大学院情報工学専攻 教授
NITech AI研究センターを中心とした実践研究事例の紹介

<装置・デバイス>

- 14 静岡大学 木村 雅和 理事・副学長
革新的光科学、新科学領域、そして新しい光応用産業を創造する。－「光の尖端都市 HAMAMATSU」
で、豊かな持続的な社会の実現のために時空を超えて光を自由に扱う。

<環境保全>

- 15 宇都宮大学 酒井 保藏 工学研究科物質環境化学専攻 准教授
汚泥処理や維持管理を軽減できる磁気分離水処理応用の新展開
- 16 埼玉工業大学 本郷 照久 生命環境化学科 環境材料化学研究室 准教授
廃棄物・未利用資源を活用した環境汚染物質の吸着・除去材料
- 17 中央大学 山村 寛 理工学部 准教授
使い古した海水淡水化膜を工業廃水処理にリユース、リサイクルする技術
- 18 東洋興商株式会社 生田 博美 代表取締役社長
「室内循環型レンジフード用光触媒脱臭装置」の開発における「PAH低減性能評価試験」の実施報告
- 19 富山高等専門学校 袋布 昌幹 物質化学工学科 教授
鉍物化技術による未利用フッ素・リン資源の機能性資材へのアップグレードリサイクルと機能性評価

- 20 富山高等専門学校 間中 淳 物質化学工学科 准教授
環境汚染物質を液滴に高速濃縮！簡易かつ高感度な環境分析法

<ナノテクノロジー>

- 21 佐賀大学 大津 康徳 理工学部電気電子工学科 教授
基板非加熱型プラズマスパッタプロセスによる透明で電気を通す膜の合成技術
- 22 三重大学 青木 裕介 大学院工学研究科 准教授
電気泳動堆積により形成される高機能セラミックス-樹脂複合膜

<低炭素・エネルギー>

- 23 工学院大学 釜谷 美則 応用化学科 准教授
分子状水素の新規吸光光度法の開発
- 24 摂南大学 川上 比奈子 理工学部 教授
水/クロロフィル系太陽光発電燃料電池システム搭載環境調和型建築デザイン

<医療>

- 25 京都大学 上久保 靖彦 大学院医学研究科 特定教授
PI-Polyamide 技術（人工遺伝子スイッチ法）による革新的難病治療薬・希少疾病用医薬品
- 26 埼玉大学 松岡 浩司 先端産業国際ラボラトリー メディカルイノベーション研究ユニット 教授
多価効果および FRET 技術を利用した高感度検出系によるメディカルイノベーション
- 27 島根大学 今出 真司 医学部整形外科 助教
自家骨から手術場で精密作製した骨ネジで骨接合する骨折治療システムの臨床成績
- 28 大連理工大学・立命館大学国際情報ソフトウェア学部 徐 睿 准教授（教務・国際交流担当）
知能計算を用いた医用画像のコンピュータ診断支援システム
- 29 筑波大学 西村 健 医学医療系遺伝子制御学 准教授
安全な再生医療を実現させる高純度分化細胞選択法
- 30 東海大学 住吉 秀明 医学部医学科再生医療科学 講師
クラゲコラーゲンを用いた皮膚再生を促進する人工真皮

<ライフサイエンス>

- 31 岩手大学 高木 浩一 理工学部 教授
農業・食品への高電圧・プラズマ活用技術
- 32 高知工科大学 山本 哲也 総合研究所マテリアルズデザインセンター 教授/センター長
表面及びバルク特性加工のための酸素負イオン生成・照射技術
- 33 奈良先端科学技術大学院大学 加藤 晃 先端科学技術研究科バイオサイエンス領域 准教授
細胞へ導入した遺伝子の発現診断

<シニアライフ>

- 34 大阪府立大学 中川 智皓 工学研究科機械工学分野 准教授
人と協調するパーソナルモビリティ・ビークルの運動制御技術
- 35 福島大学 吉田 樹 人文社会学群経済経営学類 准教授
公共交通運用に着目した地方版 MaaS の計画技術

<情報通信>

- 36 岡山県立大学 渡辺 富夫 情報工学部教授
人を引き込む身体的インタラクション・コミュニケーション技術
- 37 立命館大学 熊木 武志 理工学部電子情報工学科 准教授
LED 照明に新たな価値を提供する応用技術 ～照明から防犯・娯楽へ～
- 38 和歌山大学 呉 海元 システム工学部 教授
俯瞰視 RGB-D カメラを用いた個人再識別

<機関紹介>

- 39 成渝日本経済文化交流協会 小泉 博之 専務理事・事務局長
日中産学連携支援団体
- 40 日中経済協会 澤津 直也 北京事務所 所長代理
日中経済協会の推進する課題解決型ビジネスマッチング活動の紹介

◆日本大学フェア出展機関一覧

- 1 会津大学
- 2 秋田大学
- 3 朝日大学
- 4 亜細亜大学
- 5 岩手大学
- 6 愛媛大学
- 7 大阪大学
- 8 大阪電気通信大学
- 9 岡山大学
- 10 香川大学
- 11 熊本大学
- 12 工学院大学
- 13 高知工科大学
- 14 神戸大学
- 15 滋賀県立大学
- 16 静岡大学
- 17 首都大学東京
- 18 上智大学
- 19 第一工業大学
- 20 千葉大学
- 21 名古屋大学
- 22 名古屋工業大学
- 23 日本学術振興会北京研究連絡センター
- 24 日本学生支援機構
- 25 広島大学
- 26 福島工業高等専門学校
- 27 福島大学
- 28 北陸大学
- 29 北海道大学
- 30 宮崎大学
- 31 山梨学院大学
- 32 理化学研究所北京事務所
- 33 立命館大学
- 34 和歌山大学
- 35 早稲田大学
- 36 科学技術振興機構

1.「開会式・講演会」

中国科学技術部（国家外国専門家局）と国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が共同で主催する、日中最大規模の大学・人材・技術交流イベント「日中大学フェア&フォーラム in China 2019」が5月25日、四川省成都市の錦江賓館で開催された。中国科学技術部や文部科学省で要職を務める関係者や80名を超える日中双方の大学の学長・副学長、また各研究機関の幹部、日中の教育・科学技術分野の専門家ら合わせて1,200名以上が本会に参加した。今回も中国側からは、各省の大学・高専などの多くの教育機関からの参加が見られた。



開会式会場

今回のフェア&フォーラムでは40校以上の日本の大学・高専の学長・副学長、また研究機関および企業のトップら230名あまりが成都に足を運び、そして中国からは大学、各種学校の学長・副学長、また各方面の研究者合わせ1,000名以上が集まり、日中の大学間で行われる最大規模のハイレベル国際交流イベントとなった。また本会では中国国際人材交流協会、四川省科学技術庁、四川省科技交流中心の全面的な支持と協力を得た。



参加の大学学長・副学長

開会式では中国国際人材交流協会の潘艶傑副主任が司会を務め、各機関の代表者のあいさつが続いた。

まず中国側を代表して、中国国際人材交流協会の張建国副主席兼秘書長が「日中両国は各々の科学技術の特徴を補え合える関係にあり、その協力には大きなポテンシャルが潜んでいる。日中の共同研究については、中国側では科学技術部が、日本側では文部科学省と外務省、科学技術振興機構、理化学研究所、国際協力機構（JICA）などの多くの関係機関が共同で研究資金を投入し、双方で多くの協力と交流が進展している。2018年8月に日中政府間で行われた第16回科学技術協力委員会で、科学技術部と文部科学省は日中共同研究プロジェクトとして、『日本-中国国際共同研究イノベーション拠点』に関する覚書の署名も行い、これにより日中双方の産学官連携に関連する機関との間でのさらなる協力と交流が活発になるだろう」と述べた。また張副主席は「科学技術人材の交流に関して、日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）では2014年にはじめて実施されて以来、すでに9,000人の中国の人材が日本を訪問し、一方、2016年から始まった「中日青年科学技術人材交流計画（中国政府による日本の若手科学技術関係者の招へいプログラム）では336人の日本の若手行政官、大学や研究機関の研究者が訪中している。2019年4月には科学技術部とJSTは日中科学技術人文交流に関する覚書に調印し、さらなる両国の交流と協力が期待される」と強調した。



張建国副主席による主催者挨拶

次にJSTの甲田彰理事が日本側を代表して登壇し、中国科学技術部外国専門家、国際人材交流協会、四川省科学技術庁、四川省科技交流中心へ本会に対する協力について深い感謝を述べるとともに「日中間の学術交流の最大のプラットフォームである本会には、80以上の大学および研究機関、企業が成都へやってきた。この機会に日本の大学・研究機関には多くの中国の大学・研究機関との協力関係を構築し、国際産学官連携を促進し多くの協力に関する覚書を締結し、新たな時代

のイノベーション人材・国際人材を共同で育成してもらいたい」と語った。



JST 甲田彰理事

JST の中国総合研究・さくらサイエンスセンターの有馬朗人センター長は、日中の各地より本会に駆けつけた講演者と参加者全員に心より感謝の意を表した。その上で草の根交流の重要性を説き「日中大学フェア&フォーラムは 2010 年にスタートし、大学等の高等教育機関の間の交流に立脚し、現在までに 130 人以上の日本の大学の学長、200 人以上の中国の大学の学長が参加し、共同研究、教員の研修、交換留学等の多くのプログラムについて覚書を結んできた」と、これまでのフェア&フォーラムの足跡を紹介した。



「草の根交流」の重要性を説く有馬センター長

文部科学省科学技術・学術政策の松尾泰樹局長は「昨年に引き続き日中両国の政府間交流はさかんで、昨年 5 月に李克強首相が来日し、10 月には安倍晋三首相が訪中した。科学技術の領域では、昨年 8 月に両国政府は日中科学技術協力委員会を開催し、今年 4 月には北京で日中イノベーション協力対話を開催した。現在までに調印された日中の大学間交流の覚書は 5,700 件を超え、日本の大学における中国からの留学生は、留学生全体の 4 割を超えた。日中大学フェア&フォーラムの開催は今回で 15 回目となるが、日中双方の大学間協力・交流、留学、産学官協力を促進する重要

なプラットフォームとして大きな貢献をしている」と昨今の日中間の情勢やフェア&フォーラムの意義について述べた。



文部科学省科学技術学術政策局 松尾泰樹局長

大連理工大学の郭東明学長は、日本の大学との協力について紹介し、日中双方の大学でのダブルディグリープログラムによる国際人材育成の成功例、そしてこれまで長期にわたって展開してきた日中協力の経験について説明した。現在までに、立命館大学、東京工業大学、東北大学、名古屋大学等 40 以上の大学との大学間協力に関する覚書に調印しているという。



大連理工大学 郭東明学長

その中で 24 の大学と交換留学生の派遣、日中双方の学生による同じ授業の参加、同じキャンパスでの生活を送る、というプログラムを展開している。立命館大学とは 2+2 (それぞれのキャンパスで 2 年間履修) 協力プログラムを行い、両大学から学位が授与されるという。また東京工業大学とは 3+2 (3 年間大連理工大学で、2 年間東工大でそれぞれ学ぶ) というプログラムを推進しているという。一方、名古屋大学とも「短期留学+修士課程連携プログラム」について初歩的な合意が達成されたと発表された。

JST 中国総合研究・さくらサイエンスセンターの沖村憲樹上席フェローは、JST が推進する「さくらサイエンスプラン」について紹介した。「さくらサイエンスプラン」は沖村上席フェローが立ち上げ、中国およびアジアの青少年の短

期訪日国際交流プログラムで、その対象を原則として初来日の40歳以下の高校生、大学生、大学院生、ポスドク、教員、研究者や非営利機関の職員となっている。2014年の実施開始以来、すでにアジア各国から26,800人以上が訪日しており、その中で中国からは約9,000人が日本を訪れているという。



「さくらサイエンスプラン」を説明する沖村上席フェロー

沖村上席フェローは、自身の目標として、「さくらサイエンスプラン」を通じて「一刻も早く30,000人のアジアの青少年が訪日し、中国の青少年も1万人を達成したい。この相互理解を深める友好事業にさらに多くの大学、高校の学生・生徒に参加してもらいたい」と訴えた。

この他、中国側からは成都市科学技術局の丁小斌局長、成都天府国際空港新城管理委員会産業工作組の熊懐智副組長が登壇し、成都地区における科学技術政策の現状と展望を紹介した。日本側からは、国立高等専門学校機構の谷口功理事長、中小企業基盤整備機構の秋庭英人副理事長、日中経済協会の杉田定大専務理事等が登壇し、日本の職業教育の人材育成制度や中小企業支援制度、日本の経済産業、企業構造、日中のイノベーション技術交流の上場などについて説明を行った。



国立高等専門学校機構 谷口功理事長



中小企業基盤整備機構 秋庭英人副理事長



日中経済協会 杉田定大専務理事

また同日、北京交通大学、上海交通大学、中国科学技術大学とJSTは、協力覚書を更新し、福州大学と兵庫県立大学、青海大学と金沢大学がそれぞれ新たに協力覚書を締結し、同会場にて調印式が行われた。



協力覚書の調印式

2.「日中学長円卓会議」

講演会終了後に開催された「日中学長円卓会議」には80名近い日中の大学学長・副学長等が参加した。各大学の学長たちは、「大学における教員の評価及び育成」、「日中共同研究をいかに推進するか」、「グローバル人材の育成」、「産学連携のベストプラクティス」「技術者の育成における国際協力」などをテーマとして活発な議論を行った。

日中の大学の学長が直接対面して交流するこの会議には、早稲田大学、大阪大学、名古屋大学など37の日本の大学学長及び、中国科学院大学、同济大学、大連理工大学、華南理工大学など34の中国の大学学長が参加した。議論がはじまると、まず双方の求める情報がどのようなものかについてそれぞれの学長がポイントを提起し、その上で複数の科学研究協力の取り決め、教員派遣、交換留学生など複数の項目について、また大学間交流の意向について、活発に意見が交わされた。

本会議ではA、B、C1、C2、D、Eの6つの会場が設定された。中でも特に、新時代における日中の大学間協力の模索、推進に関する議論を目的として設けられた、B会場「日中共同研究をいかに推進するか」に注目が集まった。早稲田大学国際担当理事の弦間正彦教授をモデレータとし、高知工科大学、工学院大学、お茶の水女子大学、総合研究大学院大学、首都大学東京、同济大学、北京化工大学、長春理工大学、貴州大学、青海大学、西南交通大学、西南科技大学の学長が各大学の国際交流について紹介し、どのように日中共同研究を促進するかについて意見を交わした。



早稲田大学弦間理事がモデレータを務めたB会場

高知工科大学の磯部雅彦学長は、日中大学間共同研究の実現は、簡単なことではないとした。「中国からの留学生は日中科学技術協力の要となり、架け橋とな

るが、留学するにあたり、研究室や指導教授を探し、日本語を学んで、修士、博士の試験を受け、生活費や学費などの問題を解決する等多くの難題があり、その問題解決は容易ではない」と意見を述べた。

首都大学東京の綾部真雄副学長は、来日する留学生の重要性を指摘し、中国の教授たちに日本留学の難易度を下げるよう要望してほしいと発言した。綾部氏は状況を東京都に報告し、財政と制度上の支援を取り付けているという。



首都大学東京 綾部真雄副学長

中国の大学の学長たちからも、多くの意見が聞かれた。北京化工大学の王峰副学長は、政府の政策が国際協力促進の重要性を支援することについて回答し、また中国科学技術部の国際交流経費の効果についても積極的に肯定し、日中両国政府が双方の科学技術協力の分野を拡大すべきと考え、プログラム協力経費の限度額を増やしたことをアピールした。

また西南科技大学の董発勤学長は「我が校は2019年2月にさくらサイエンスプランに参加（受入れ機関：法政大学）し、新しい協力関係を切り開くことができ、自然科学分野の留学に新たな機会を得られた。政府支援の効果をより一層感じた。その一方で、受け入れ大学の海外留学生は語学留学生が中心で、専門知識を学ぶには不十分であるのが課題である」とも発言した。

これに対して早稲田大学の弦間理事は、英語での授業の実施は、多くの国の留学生、特に理工系の学生にとって日本語学習の難易度を下げ、専門知識を学ぶことを目的とした留学を増やすことになると指摘した。

一方、中国の大学の中でも国際化が最も特徴的な大学の一つである同济大学の顧祥林副学長は、同济大学の歴史を紹介するとともに、学生のレベルでの、また学院および大学レベルでのそれぞれ異なる日中協力の形について紹介し、これも同济大学の日本で学位を取得し

た 100 名あまりの教員の利益につながるとした。顧副学長はまた、同済大学は今ある協力モデルの基礎の上に、新しい日中協力の在り方を模索していると発言した。



同済大学 顧祥林副学長

3.「日中交流会」

円卓会議終了後開催された日中交流会には、日中両国の大学・高専の学長、教育・科学技術行政関係者らを中心に 400 人以上が出席し、熱気溢れる日中交流の場となった。

JST 中国総合研究・さくらサイエンスセンターの米山春子副センター長が交流会の司会を務め、冒頭に参加者全員へ日中大学フェア&フォーラムへの参加・協力に感謝の意を表した。そして JST の齊藤仁志副理事は開会のあいさつで、「日中両国の大学の相互交流が、多くの実を結ぶことを願います。ここからはネクタイを緩め、胸襟を開き、率直に交流しようではありませんか」と笑顔で会場を盛り上げた。

副理事



JST 齊藤仁志副理事

交流会には在重慶日本国総領事館の渡邊信之総領事も参加し「中国西部大開発戦略の拠点で、欧州と

東南アジアが交わる場所に位置する西南地域は、ますます重要な力を発揮しています。今回のイベントが西南地域で開催されたことは非常に有意義なことです。本日午後の講演会、日中学長円卓会議を通じ、双方は相手側への理解を深めたことと思います。明日の個別会談と展示を通じ、日中大学間の相互理解が深まり、具体的な協力・交流活動を展開することを願います」と述べた。



在重慶日本国総領事館 渡邊信之総領事

また四川省科学技術庁副庁長・四川省外国専門家局長の楊品華氏も交流会に駆けつけた。楊氏はまず日中双方が心をついに協力し、今回のイベントに大きな影響力を持たせたことに謝意を表し、晩会を通じ意思疎通を図り、協力をさらに拡大し、ウィンウィンを実現することへの期待感を示した。

四川省科学技術庁 副庁長
四川省外国専門家局 局長



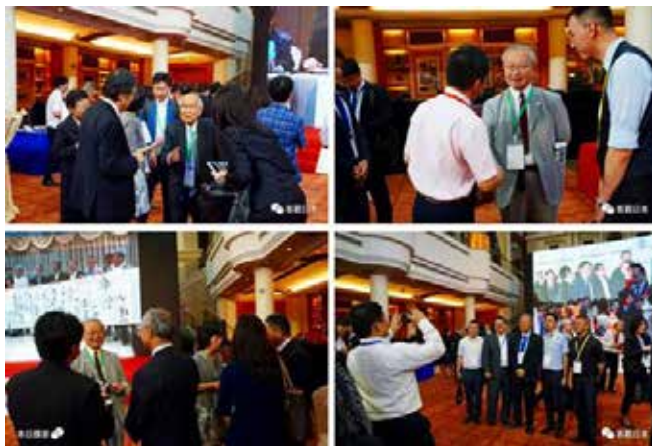
楊品華 四川省科学技術庁副庁長・
四川省外国専門家局長

日中大学フェア&フォーラムの創設者、JST 中国総合研究・さくらサイエンスセンターの沖村憲樹上席フェローはあいさつで、「大学フェア&フォーラムは始めたばかりの頃は無名でしたが、今日では、千人を超える規模になりました。これは皆さまが共に努力した結果です。日中間の科学技術交流が今後さらに普及すると信じています。日中大学間の協力と交流が、より大きな発展を実現することを願います」と述べた。



沖村憲樹上席フェローによる乾杯挨拶

交流会では、日中双方の参加者が積極的に相手側へのアプローチを見せ、相互理解を深めることに成功した。和やかなムードに包まれ、笑い声も絶えなかった一方、将来的な日中協力について真面目に考え議論する参加者の姿もあった。交流会は日中双方の交流の輝かしい未来を象徴するようなイベントとなった。



会場の様子

4.「日中学長個別会談」

2日目の26日は日中双方の協力・連携に重きが置かれ、「日中学長個別会談」「日本大学フェア」「日本新技術展」の3つのイベントが同時に行われた。

「日中学長個別会談」は、日中の大学や研究機関のトップ同士が直接交流する活動で、日本側からは早稲田大学、大阪大学、名古屋大学、北海道大学、理化学研究所などをはじめとする40機関が参加した。また、中国側からは中国科学院大学、電子科技大学、蘭州大学、蘇州大学など、全国各地から学長等執行部関係者が参加した。交流実績のある大学同士は旧交を温め、協力関係をより一層発展させたのはもちろんのこと、今まで接触したことのない「初めまして」の学長同士を繋ぐことにより、大学間相互交流への第一歩の場となった。

例えば、高知工科大学では、磯部雅彦学長と中国科学院大学の蘇剛副学長が会談を行った結果、大学間協定を結ぶことで一致したという。



高知工科大学 磯部雅彦学長

工学院大学は、協定を締結していたものの、交流が途絶えていた北京化工大学と再会し、協力関係の確立の認識を新たにすると期待感をにじませた。



工学院大学 鷹野一郎副学長

また、その他のブースでも、学生の相互派遣や共同研究の可能性や、MOU 締結に向けて活発な意見交換が行われた。



神戸大学ブースにて電子科技大学と



会場の様子

名古屋工業大学の担当者は、「特にこれまで接点が多かったとは言えない、中国内陸部、南西部の特色ある大学との情報交換は意味があった。今回のイベントを契機に、中国の大学との交流がより深まればと期待している」と述べた。

5.「日本大学フェア・日本新技術展」

日本大学フェアには日本の大学・高等専門学校、研究所等 36 機関、日本新技術展には 40 機関が出展した。

日本大学フェアの会場で、来場者に丁寧な説明を行っていた大阪大学では、留学生向けに複数の専門分野で英語での授業を行っており、留学生から日本語学習の困難さを幾分緩和している点を強調していた。一方、岡山大学では留学生向けに豊富な奨学金情報を提供し、留学生が学業に専念できるようにしているといい、ブースを訪れた来場者の多くは岡山大学の姿勢に好感を持ったようだ。また立命館大学は中国人留学生向けに立命館大学とオーストラリア国立大学のデュアル・ディグリー（学部共同学位）取得プログラムを設け、学生が西洋と日本の二つの言語・文化的背景を持てるようにし、卒業生の就職競争力を高めている。

このように、出展した大学は各校の学校運営の特徴と留学生の生活や勉強に関する問題を解決するさまざまな制度を来場者にアピールした。疑問を抱いて相談に来た来場者らは、満足感を胸に会場を後にしていた。



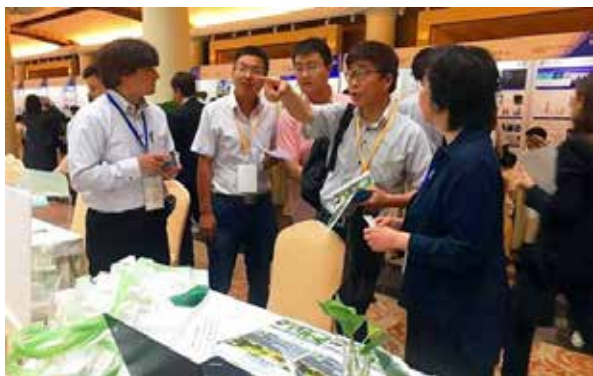
留学情報について尋ねる来場者

日本新技術展では、日本の大学・企業が研究開発した多くの技術が展示され、研究成果の製品化の可能性を探った。技術展には、素材や素材リサイクル利用技術、スーパースマート社会、装置・設備、環境保護、ナノテクノロジー、低炭素技術、エネルギー技術、医療技術、ライフサイエンス、高齢化社会、情報通信技術など、多くの技術領域がカバーされていた。

熊本大学が開発した KUMADAI 不燃マグネシウム合金は、長周期積層構造（LPSO 構造）を持ち、強度は従来のマグネシウム合金の 2 倍以上で、その上高温に耐えるという特長があり、従来のマグネシウム合金の

可燃性が高いという欠点を克服し、輸送器材に適した軽量化がなされている。また、マグネシウム金属は生命体への影響が小さく、生体吸収性の医療用素材として合金開発が行える。この技術はすでに中国で特許を出願しており、中国側企業は特許授權などの形で合金の配合と製造方法を取得後、大量生産を行うことが可能だ。

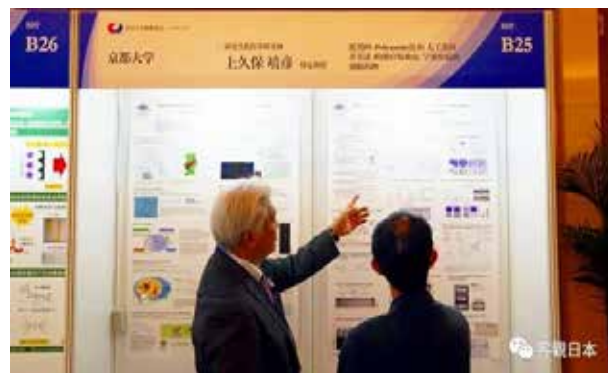
摂南大学の川上比奈子教授はクロロフィルを利用した発電燃料電池システムを開発した。その原理は、まずどこでも入手できる植物からクロロフィルを抽出した後、独自開発した培養液を入れて、クロロフィルが人工環境で長時間活性を保持できるようにし、しかも太陽光照射の下で効率良く水を水素と酸素に分解できるようにする。最後に、再び水素燃料電池の方式で電力を発生させる、というものだ。現在、16 平方メートル前後のクロロフィルパネルで 20W の電力を提供できるという。その電力は市場に出回っている単結晶系シリコン電池パネルには及ばないが、クロロフィルという自然元素を新しい建築設計理念に取り入れることに成功している。昼間、このシステムが発電した電力は消費電力の低い家電に使用され、同時に燃料電池に蓄えられる。夜間、電力は照明などに使用される。このシステムは自然資源を繰り返し利用することで成り立つ低炭素システムであり、自然環境と完全に調和した新たな居住環境システムの提案である。



来場者に電池システムの稼働原理と特徴を説明する
摂南大学川上教授（右）

京都大学は同大学理学院研究科の杉山弘教授の技術に基づいて、良好な細胞透過性を持つピロール・イミダゾール（PI）ポリアミドを開発した。これは天然の抗生物質の化学構造を基に開発した合成分子で、ピロール、イミダゾール、 β -アラニンのユニットがアミド結合で結びついてきた簡単な構造である。京都大学の研究者は標的とする DNA 配列に対し選択的に結合分子を設計でき、さらにさまざまな PI ポリアミドの合成と活性評価関連技術知識を有している。医学研究科の上久保靖彦特定

教授はこの革新的技術を使用し、杉山教授と急性白血病、肺がん、脳腫瘍、小児がんなど各種難病の新薬を共同開発し、難病や希少疾病用医薬品の研究開発に新たな方法を提供した。



来場者へ説明する京都大学上久保特定教授（左）

和歌山大学の呉海元教授は顔情報などプライバシーの保護に関する問題を踏まえ、建築物の入口上部に設置した俯瞰視 RGB-D カメラで個人を再識別する方法を開発した。この方法は人の服装、毛髪の色、体型が短期間では変わらないと仮定し、上記のような個人特徴を持つ色情報と画素数を効果的に利用した人物多重識別特徴を打ち出した。同システムは簡単に設置でき、従来のような顔や指紋、手紋（手のひらの筋）といった個人情報を利用する必要がなく、プライバシー優先の識別方式を実現している。このシステムは日本のスマート社会（Society5.0）技術の構成部分として、出勤状況管理や路線バス・電車の運賃自動決済、公園・協議会やイベント会場の人数管理、「将来の高齢者看護サポート」などのシーンで用いることができるという。



和歌山大学呉海元教授（右）

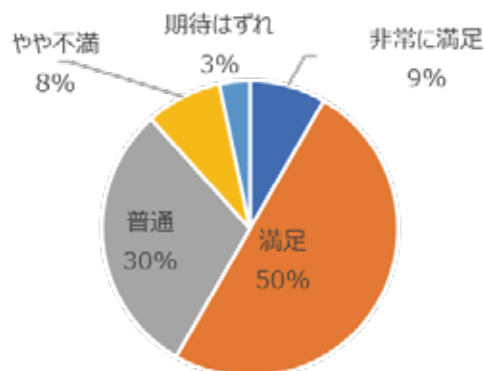
6. アンケート集計

有効回答数 93 ※参加したイベントに関する項目のみ回答

問 1.「日中大学学長円卓会議」

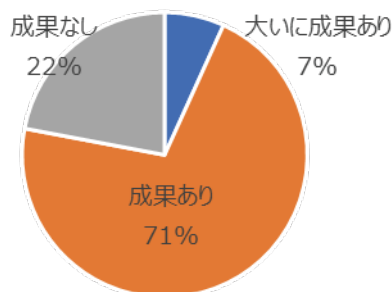
① 評価

非常に満足	5
満足	30
普通	18
やや不満	5
期待はずれ	2



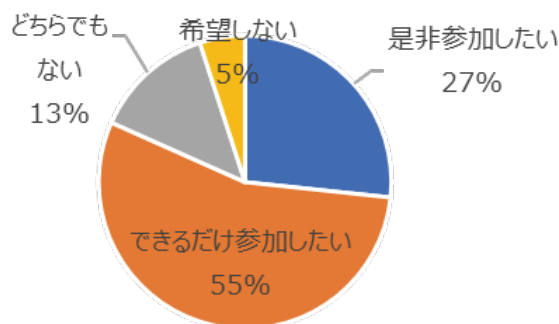
② 会議の成果について

大いに成果あり	4
成果あり	42
成果なし	13



③ 今後の参加について

是非参加したい	16
できるだけ参加したい	33
どちらでもない	8
希望しない	3



< 「日中学長円卓会議」について具体的な感想、意見（抜粋） >

■グループ B では「How to promote Japan-China collaborative research」をテーマに「co-supervise 制度の活用」、「日中大学間の派遣と受入れのアンバランスの解決策」、「人文科学系分野における交流促進の可能性」等具体的な方策・課題について日中各大学の考え方が示され、国際交流を今後展開する上で参考になった。

■中国の大学がインバランス（派遣過多）の状況に問題を感じていることが分かった点が良かったです。一方で英語でのディスカッションが十分に成立出来ておらず、折角各大学のトップ層が集まっているのにも関わらず、深い意見交換に至らなかった点は残念に感じました。次回以降は円卓会議にも通訳を入れた方が良いのではないかと思います。

■E 会場:技術者の育成における国際協力について参加しました。各校それぞれに国際化に関して積極的に努力しており、方向性を共有できればもっと活性化できると感じました。

■今回、「産学連携」関連の円卓会議を出席して頂きまして、日中大学の参加者のご紹介・ご説明により、各大学の産学連携活動の取込み事例と特色を聞いて頂きまして、大変参考になりました。また、本学の産学連携活動のアピールも出来て、大変有意義な会議でした。

■1)日本と中国の学長は一堂に自由に意見を述べる機会が今まで少ない方です。できるだけでも大きな成果だと思います。2)モデレータのサイモン先生のおかげでみんな英語で意見を言ったり議論したりすることはとてもいいと思います。3) グローカルや共感に対する取込みなど新しい情報がありました。とても参考になります。

■所属大学を含む、C-2 グループの学長円卓会議に随行した。日中それぞれの大学の特徴、ストロングポイント、国際化に対する取り組みについて語られた。特に中国側の大学が何を求めている、現在の留学生の派遣と受け入れの実状と、将来の方針について伺うことが出来て大変有益であった。大学を代表してのトップ同士の公開会議なので、国連等の首長会議と同じくあらかじめ準備した原稿に沿った方針発表の場となり、議論の場という要素は薄かった。

■日中の各大学が進めている産学連携について、様々な取り組みを知ることが出来た。また、中国の企業の多くが「（企業の視点から考える）基礎研究」は大学に進めてもらうというスタンスに対して、日本企業の多くは時前で最低限必要な「基礎研究」を進めているといった違いが、円卓会議終了後の参加者との議論で出てきたのは興味深い。

■日本側の報告は、業績評価とFDに関連した内容であり参考になったが、中国側の大学の報告がテーマに沿ったものは少なく残念であった。

■「グローバル人材の育成」のグループで参加した。2時間の時間で14校という構成で、各大学が5分間の発表を行った後にディスカッションをしたため、①ディスカッション時間が少なかった、②各大学の発表の統一性が無かった、③ディスカッションのテーマ設定も難しかった、などの状況があった。テーマが大きいのので、様々な観点からの意見が出たものの、逆に共通した観点での議論が難しかった。もう少し絞り込んだテーマを提示してほしい。

■日中各大学のグローバル人材育成の実例について、有益な情報を得る機会であった。ネットワーキングの機会としてよかった。

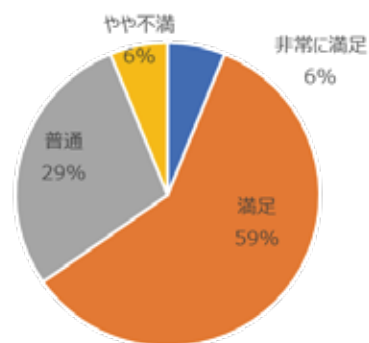
■他大学の先進的な取組を知ることができただけでなく、同席した先生方との交流も成果の一つとなった。特に、香港中文大学の教養教育の取組は参考になった。

■成果があったと感じた点 1. 本学の学長が提示した案に賛同を得られたこと 2. 今後、交流が進みそうな大学と情報交換ができたこと。一方で、次の2点については改善を希望します。1. 円卓会議発話者に配付された資料が別会場のものであった 2. 発表時間が限られているにもかかわらず、過半数の大学が大半の時間を大学の概要等の説明に費やし、テーマに関するアイデアがあまりなかった

問 2.「日中大学学長個別会談」

① 評価

非常に満足	3
満足	29
普通	14
やや不満	3
期待はずれ	0



② 会談の内容について（複数回答可）

MOU 締結	21
教員交換	23
学生相互派遣	32
留学案内	25
共同研究開発	13
産学連携	6
さくらサイエンスプラン	11
その他	11

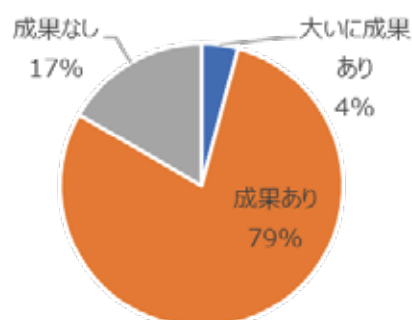


※その他回答の内容（抜粋）

教員評価体制、教員研修、ハードウェア実験の設計に関する交流、3+1、2+2、ダブルディグリー等の共同プログラムの意見交換等

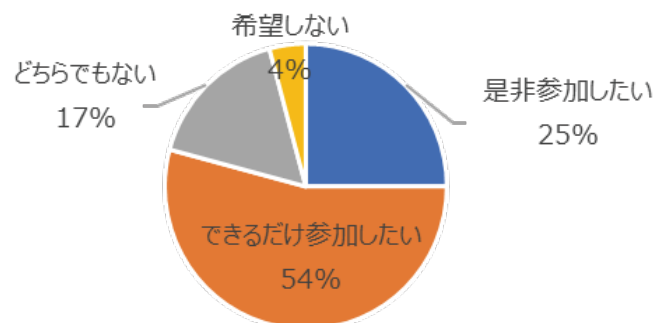
③ 会談の成果（手ごたえ）について

大いに成果あり	2
成果あり	38
成果なし	8



④ 今後の参加について

是非参加したい	12
できるだけ参加したい	26
どちらでもない	8
希望しない	2



<「日中 学長個別会談」について具体的な感想、意見（抜粋）>

■ 本学が提供する研修プログラムにいくつかの大学が関心を示してくれた点と、中国の大学におけるカリキュラムの組み立て方や、学生のニーズに対してどのような取り組みを行っているのか、という話を聞くことができた。今後の留学生受け入れ促進策を検討する際に有益となった。

■ これまでお付き合いのない大学の方と交流できたので有意義であった。

■ 大学院院生の相互派遣と共同研究の可能性について中国の大学と相談し、1 件の MOU 締結の話がありました。さくらサイエンスプランの取込み事例を中国の大学参加者に説明しました。

■ 日中大学の国際担当者間での直接交流できる場を持つことが大変重要な意味があり、国際交流の意思決定や執行を担当する日中大学の関係者が直接意見を交換できたと思います。一方、日本の参加大学間についても、この機会で見聞交換も行うこともできて日本の大学の国際交流に対しても情報交換ができ他大学のよい経験を学ぶ場としてもよいだと思います。大連理工大学の「同窓友情」の提言について連携に向けて積極的に検討することになりました。

■ 1) 科学院大学のスケール、博士教育の充実さそして深センの先進技術研究院の取り組みなど今まで知らなかったことが多かったです。互いに接点が見つかった事はいい収穫とっております 2) 電子科学技術大学と様々な留学交換プログラムについて議論しました。

■ 今回の個別会談の最大の目的である大学との会談を行うことが出来た（個別のラインを構築することが出来た）。

■ 大連理工大学と具体的な学生・教員派遣のプログラムや財政支援などの議論が出来た。また、欧米の大学と中国の大学が連携した新しい大学（西交リバプール大学など）について知ることが出来た。

■ 帰国後に個別対談を行った中国の副学長および担当者のかたがたとメールでの意見交換も行うことができています。

■ 複数の中国の大学の学長レベルと直接お会いすることができ、交流の可能性について議論することができたので、数校とは交流協定締結を前提に協議を続けることになった。

■ 協定先の拡大、今後に直結する具体的な国際交流の話をする事ができた。大変良い機会となった。

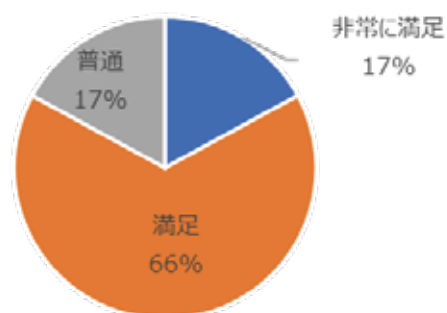
■ 四川建築職業技術学院が当校との学生交流、教員交流を強く希望していることが判った。

■ 協定締結を希望していた大学から同意を得られたことは大きな成果であった。しかし、会談前日に会談予定の2校からキャンセルの連絡があったのはとても残念であった。

問 3.「日本大学フェア」

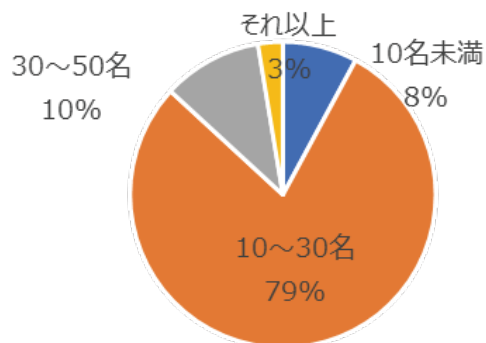
① 評価

非常に満足	7
満足	27
普通	7
やや不満	0
期待はずれ	0



② ブース来訪者人数について

10名未満	3
10～30名	30
30～50名	4
それ以上	1



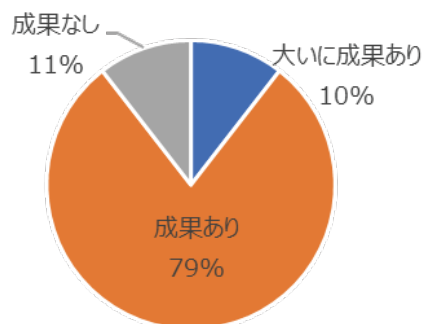
③ 対応した内容について（複数回答可）

MOU 締結	6
教員交換	0
学生相互派遣	8
留学案内	28
共同研究開発	5
産学連携	1
さくらサイエンスプラン	1
その他	10



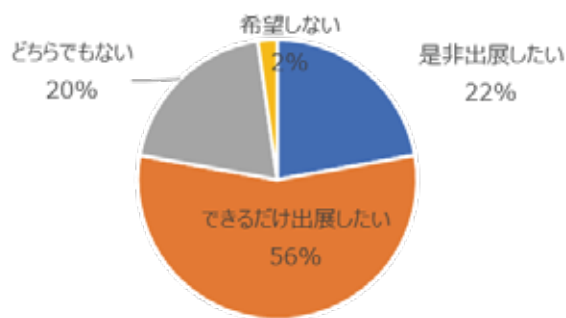
④ 出展の成果（手ごたえ）について

大いに成果あり	4
成果あり	30
成果なし	4



⑤ 今後の出展を希望しますか。

是非出展したい	10
できるだけ出展したい	25
どちらでもない	9
希望しない	1



<「日本大学フェア」について具体的な感想、意見（抜粋）>

■ 四川以外にも中国全土から教育関係者の参加があったことから、いろいろなお話をすることができた

■ 高専で出展したのが、本校だけだったため、高専システムそのものにも興味をもつ教育機関が、昨年度より増加した。

■ 留学したい学生に対して、留学案内をした。その他、協定校との学生相互派遣について議論した。非協定校との MOU 締結や共同研究について意見を交換した。

■ 来訪者の日本語トレーニング学校と中国の各地の大学などの担当者より連携協定についてのご相談がいただき、今後の国際交流における、役に立てるかと思います。

■ 学生や保護者への対応がよかったが、一部企業の方からの売り込みがあり、あまり生産的ではなかった。

■ 14 名の学生がブースに留学等の相談に来てくれた。またその他に資料のみを持ち帰った学生等の参加者がいた。本学の強みや制度について直接希望者に説明ができた。

■ 中国の父親たちから、息子を日本に留学させたい、との熱意を感じた。そのための日本語、または英語レベル、奨学金についての質問が多かった。中国の国家重点大学に入学するには、それだけ競争が激しいからだろう。中国の学生は英語ができるので、日本の大学の学部や大学院で、英語の講義を増やす努力をしたい。

■ 地方政府関係者、企業関係者（内容を特定せず協力を希望）、大学、研究所関係者が数組来訪、いずれも理研との協力を希望。一つは、すでに交流のある大学（物理学院と連携大学院協定あり）で、更なる協力の拡大を希望され、その後メールで連絡をしている。一方で、学生の来訪は全くなかった。

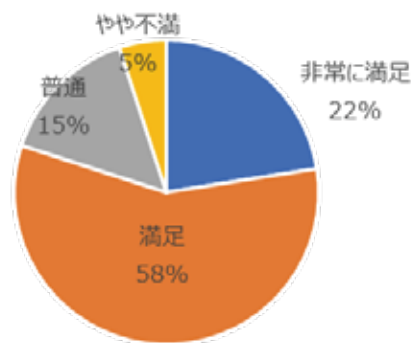
■ ①学術交流協定校と、これからの学生交流について意見交換した。②協定校との事務連絡。③協定校以外の大学の来訪者と、学生交流などについて意見交換した。

■ 協定校ではない大学等と学生受入および派遣について意見交換ができ、中国における新規開拓の一助となったと感じた

問 4.「日本新技術展」

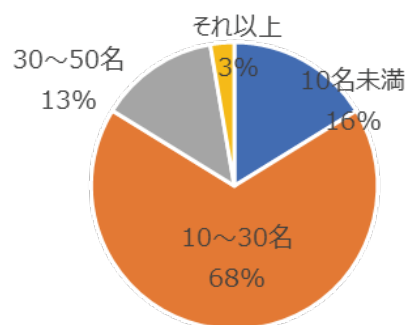
① 評価

非常に満足	9
満足	23
普通	6
やや不満	2
期待はずれ	0



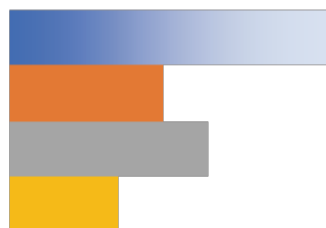
② ブース来訪者人数について

10名未満	6
10～30名	25
30～50名	5
それ以上	1



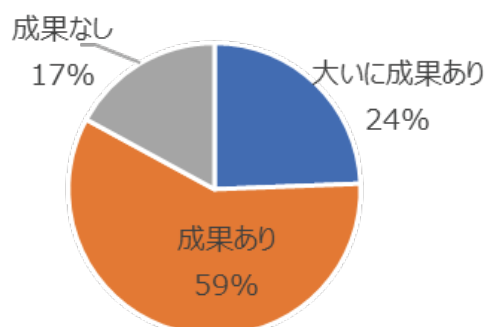
③ 対応した内容について（複数回答可）

情報収集・意見交換	36
技術移転	17
共同研究開発	22
その他	12



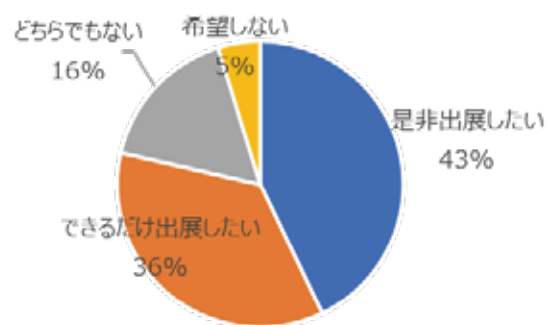
④ 出展の成果（手ごたえ）について

大いに成果あり	10
成果あり	24
成果なし	7



⑤ 今後の出展を希望しますか。

是非出展したい	18
できるだけ出展したい	15
どちらでもない	7
希望しない	2



<「日本新技術展」について具体的な感想、意見（抜粋）>

■ いくつか先方からすでにコンタクトがあります。具体的にどのように中国とマッチングを進めるかが今後の課題です。

■ 弊社技術に興味がある方々から技術的な質問等を多く寄せられています。中には、中国での光触媒製品(特に空気浄化製品)には、効果の無いものが多いので技術的な共同開発提案を頂く事や、出資条件含み提案があり、帰国後のプレゼンの準備中です。

■ 中国各地から研究所、大学、企業の関係者が日本に対して期待する情報を得ることができました。幣協会では医療、福祉、環境、農業などの分野で日中合作のご相談を受けました。具体的な詳細情報についてはこれから資料を頂いて意見交換致します。

■ 複数の企業の方と情報を交換し、連絡先の入った名刺を頂いた。これからの進展は大学間とのやり取りとなり、第 1 段階は無事終了した。こちらの要望としては、名札は一様に来賓者の表示であり相手の背景が全く分らなかったため、少なくとも大学、研究施設の方なのか、企業の方なのかは表示して頂きたいです。

■ 展示後に具体的な今後のアクションについて相互やりとり有り。当方の開発した装置を購入するなどの件について。

■ 最先端の薄膜生成装置をすぐにも買いたい、ぜひ連絡してほしい、との申し出が中国の企業関係者からあった。先端技術をすぐに取り入れようという姿勢は見習いたい。逆にいえば、日本の政権は科学技術に対する理解が乏しく、イノベーションを国策として推し進めようというビジョンがない。平成というのは、失われた 30 年だった。

■ 研究者自身が現地の研究者や企業の方と直接話して、中国での状況やニーズを把握いただくことで研究推進を図るには有用な場であった。

■ ブース訪問者の中で 3 社は弊社が展示紹介する「レーザーによる樹脂溶接システム」に大変興味がある、日中大学フェアが終わった後、その技術の連携モデルや費用等の詳しい話を進めている。

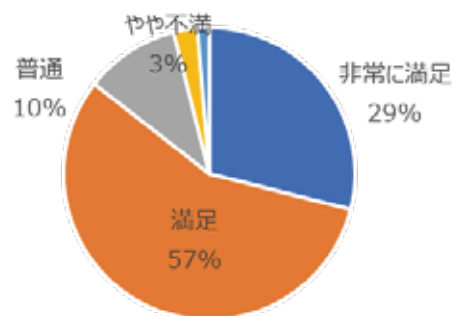
■ 多くの方にご来場いただき、パーソナルモビリティの存在、用途等をお伝えすることができた点は一定の成果があったように思います。また、シニアライフという項目での出展であったため、高齢化社会における本研究の関わり方についての質問も多く寄せられ、私自身としても研究の今後のあるべき姿を見つめなおす良い機会になったように思います。

■ 会社の方針が決まれば、中国側の意思決定と行動が非常に早いと思われる。弊社の鋳物技術と寸法精度に興味を持って頂いたと考えている。今後ノウハウをどう保護しながら協業出来るが課題と思われるので 良い検討の機会になっていると思います。

■ 医療機器を世界展開する会社と意見交換を行った。将来海外展開を模索しているので、その選択肢が増えた。

問 5. 「企画運営全般」

非常に満足	22
満足	43
普通	8
やや不満	2
期待はずれ	1



<「企画運営全般」について具体的な感想、意見（抜粋）>

■初めての参加でしたが、国際交流事業に携わっている中国の学院長や他高専・他大学及び JST の担当者と直接意見交換ができ、さらに成都市サイエンスパーク視察等、私にとって有意義なイベント参加となりました。

■日中大学フェア&フォーラムは、日中の大学の教育・研究連携を進めるための、行き届いた準備がなされたイベントであると感じる。発展を続ける中国と日本の大学を結びつけるワンストップ的なイベントであり、今後の継続開催が期待される。

■成都には 8 年ぶりの訪問だった、新天府などこの 5 年間のめざましい発展ぶりを体験できた。今後も中国各地での開催を望みます。運営に関しては種々ご手配いただきありがとうございました。

■さくらサイエンスプランの意義が各所に示されていた。さくらサイエンスプランでの日中の交流実績について実施校から発表する機会があっても良いと思った。

■全体として満足であったが、次の点が気になった。

(1) 学長円卓会議について、テーマの捉え方がまちまちで、議論にならなかったように感じた。また、中国側の何人かの学長は、英語の通訳を連れてきており、学長円卓会議を英語で行う必要があるのか疑問に感じた。日本語と中国語の通訳がいれば十分ではないか。

(2) 日本大学フェアについて、ブースに配置された日本語と中国語の通訳は、あまり機能しなかった。2 校に対応したが、1 校は日本語の通訳を連れてきており、もう一校は英語で意見交換することとなった。また、2 校はキャンセルであった。

■円卓会議は、中国側は通訳を通じて意見交換していたが、無理にお互いが英語で意見交換する必要もないと思う。中国語は国際的に多くの人が使っている言葉なのだから、尊重する必要があるし、実質的に日中両国のお互いの意見交換ができるよう、双方に通訳をつけて、日本語と中国語で意見交換した方がよいのではないかと思う。

■今回の運営全般について、視察の機会も含め、企画運営に携わられた関係各位のご尽力のお蔭様で、大変に実りある参加が叶いましたことに御礼申し上げる次第でございます。1 点、円卓会議については、短時間ながら意見交換を行った成果として各グループからの簡単な取りまとめの発信ができればとも考える次第です。

- 円卓会議について、特に中国の大学においては、単に各大学の概要説明に留まっていた。時間も不十分であったし、議論的にも中身が殆どなかったので、改善を望みます。
- 多くの参加者をコントロールするのは非常に大変だったと思います。スタッフの皆様の誠意ある対応と現地の協力者の皆様の暖かいホスピタリティに感激しました。ただ「日本新技術展」は参加者と出展者のマッチングが難しいと思いますので、今後はテーマを設定するなど分野を絞った方が盛り上がると思います。
- 3日の期間中、新技術展の実働は半日だったので、もっと長い方が良いかと思います。
- 学長らが集う学長フォーラムと新技術展は異質。別個に開催するほうが良いと思います。
- 中国語でのやりとりは正直、なかなか難しかった。これは通訳にあたる方が学生であり、工学技術に関する専門用語に関しては不慣れであることがその原因であった。
- 技術展のブースで地元の大学生を通訳として起用したことは、たいへん素晴らしいと思いました。技術的専門性はともかくとして、大学間交流として大いに意義があると考えます。
- 中国での光触媒技術は進歩しているようで、実は懐疑的な製品が多く流通している。光触媒技術専門ブースを一区画設けて頂きたいです。
- 学長個別会談について、日本側4年制大学と、中国側3年制専科学校との個別会談をしても、協働できるテーマが見出しにくいので、改善が必要ではないかと考える。
- 中国の成都内の近況を自分の目で確認できた点や中国の開発拠点の国策も見れて参考になった。直接ブースや個別打ち合わせもさせて頂き 精密铸件に非常に興味が高い事も十分感じる事が出来て良かった。今回がきっかけで直接ビジネスがスタートする可能性もあり、今後期待も大いに有ると考えている。
- まず、このような大規模なイベントのオーガナイズには大変苦労が多いと思います。大成功だと思います。主催側に本当に感謝いたします。あえて言えば会場環境はさらに工夫する必要があります。マイクの音(音響設備)が大会場のため届け辛かった、特に懇親会の時に挨拶・スピーチなど後からほとんど聞こえませんでした。正式なセッション以外にインフォーマルの交流は大事ですが、ほとんど日本からの方同士で交流して中国サイトの参加は少なかったと思います。その成り行きに任せるのではなく、一定の仕組みが必要だと思います。例えば食事ときの机の席のアレンジで混ざったり、より多くの学生を招聘して、直接に話し合ったりすることも考えられます。
- 討論や大学間交流などの運営は非常にスムーズで、参加者は快適に過ごすことが出来た。初日午前中のパンダの見学も、成都ならではの企画であり、非常に満足しました。これに比べて、二日目午後の四川大学訪問は、内容的に薄く、参加者の満足度は低かったと感じます
- 視察ツアーの内容は直前まで未公表でした。早期に参加申込者にツアー訪問場所が連絡されると良かったです。